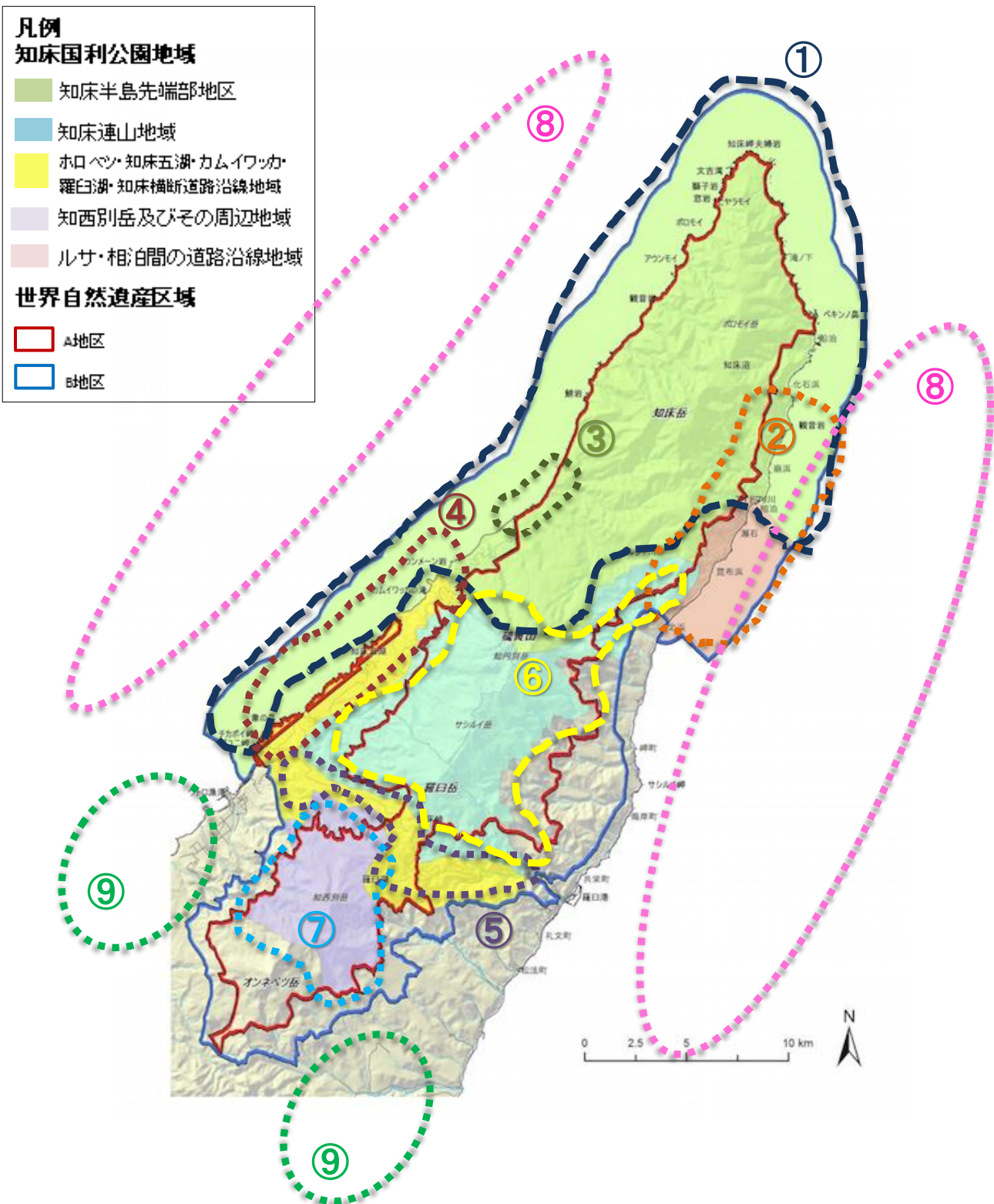


2017年～2018年度開催「知床国立公園利用のあり方に関する懇談会」 資料：ゾーニングとイメージ(案) より抜粋



①先端部地区全域（冒険と原生の旅）

容易にアクセスできるフィールドでのアクティビティやスポーツ的登山、トレッキングとは一線を画した「冒険と原生の旅」。ヒグマとの出会いや険しい地形、荒れる海のリスクを乗り越えて、野営しながらたどり着く感動の到達感、日本離れした大風景と非日常の秘境感を提供することに特化する。旅の過程で、豊かな海を糧に生きる人々との出会いや交流も大切な思い出となる。

②羅臼側先端部海岸線ルサ～観音岩（番屋の営み、フィッシャリーズム）

羅臼の豊かな海を糧に、「番屋」という知床ならではの営みの場における暮らしを積極的に発信。浜に根ざして生きる人々との出会いや交流も重要な体験要素とする。

③先端部地区ルシャ（知床の核心を見る、ワイルドライフウォッチング）

サケマスの上・産卵とヒグマや猛禽類などの捕食による陸と海の繋がり、世界遺産の核心を学ぶ。圧倒的なヒグマ体験。全国で爆発するクマ問題への普及啓発の場、人々を思考停止にしている恐怖の猛獣という誤解を解き、自然な生き様を知る場とする。共存の道を模索するきっかけ作りの場とする。

④ホロベツ・知床五湖・カムイワッカ（多様な知床体験ニーズに応える）

観光バスやシャトルバスを利用した周遊観光から、比較的手軽なバックカントリー利用まで多様なニーズに応えることができる地域として活用していく。陳腐化させることなく他と差別化した知床独自の体験を提供する工夫、ヒグマ等との軋轢回避対策が求められる。

⑤羅臼湖・横断道路沿線地域（知床岬の景観を楽しむ手軽な周遊観光と羅臼湖での奥知床体験）

車両を利用した周遊観光から、2時間程度で比較的手軽な高山バックカントリー体験が可能な羅臼湖、深い森を味わうことができるポンホロ沼などを楽しむ。

⑥知床連山地域（知床を象徴する山並み、両側に海を眺む希有な山岳体験の場）

海にそそり立つ連山の稜線に到達する満足感。眼下の両側は海、はるか国後島・エトロフ島までの眺望は、他では得がたい感動を得ることができる。広大なハイマツ帯や雪田群落の高山植物も知床の山の魅力である。基本的に中級以上の登山者を対象とした山域として管理し、必要以上の整備は行わない。

⑦知西別岳及びその周辺地域 （人気の少ない知床らしい山域、残雪期のアウトドアフィールドとしての展開を探る）

羅臼湖入口へのアクセス方法を検討できれば、残雪期のすばらしいフィールドになり得る。根室海峡にめがけて滑り下る知西別岳から湯ノ沢までのロングダウンヒルコースは感動もの。

⑧先端部地域沿岸海域 （シャチ、マッコウが躍動する感動海峡、火山と流氷が創り出した断崖絶壁、渚のヒグマは珠玉の思い出となる）

ウトロ～知床岬に続く絶壁と大風景、海岸で見ることができるヒグマや猛禽類、海鳥など野生との出会いの濃さは知床ならではの。豊穡の海、根室海峡はシャチやクジラ、イルカなど大型海産哺乳類との感動の出会いの場。大型猛禽、トド、アザラシ類を対象とする冬期の観光船事業も充実が望まれる。

⑨半島基部 斜里岳・海別岳山麓 （雄大な農業景観と知床ならではの背景の組み合わせは感動を呼ぶ）

斜里平野から周辺の山間野山麓部については、人気の観光地である富良野盆地周辺に比して勝るとも劣らない美しい風景を有している。また、峯浜地区の広大な牧草地とはるかに望む根室海峡・国後島の風景も実は大きな潜在性を有している。しかし、そこに欠けているのは来訪者をもてなす仕組みや人の存在、そして魅力的な「食」である。両地域で生産される畑作物や畜産物、そして知床ならではの海の幸を洒落た形で提供できる宿泊施設・レストラン等を展開し、知床の観光の新たな分野を切り開く。乗馬やスノーモービルのツーリングコースの設定など、国立公園内では難しいアクティビティの展開も可能だろう。